

【乳汁検査まとめ】

はじめに

今年も上半期が終了しました。そこで今年の1月～6月において弊社にて実施した乳汁検査の結果をお伝えしたいと思います。

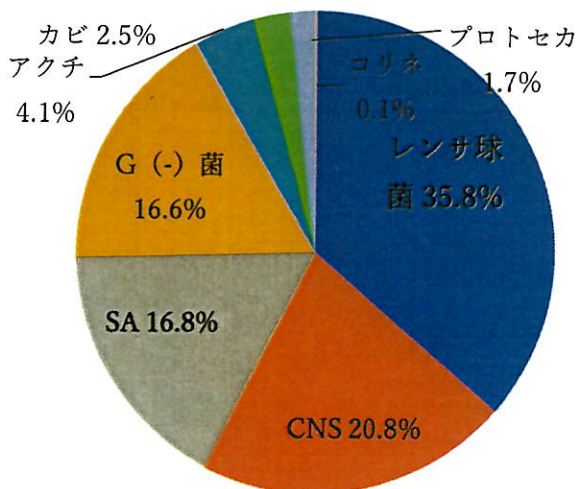
検査頭数は968頭（重複含む）、検査分房数は1740分房（重複含む）でした。去年の同時期がそれぞれ911頭、1739分房でしたので、検査数は例年通りです。

略語・薬品名対応表

略語	注射薬	軟膏
AM	アンピシリン	—
Cz	セファゾリン注	セファメジン・セファゾリン
K	カナマイシン	タイニーPK
ERFX	バイトリル 10%	—
ST	トリオプリン	—
T	OTC注	OTC軟膏

原因菌種割合

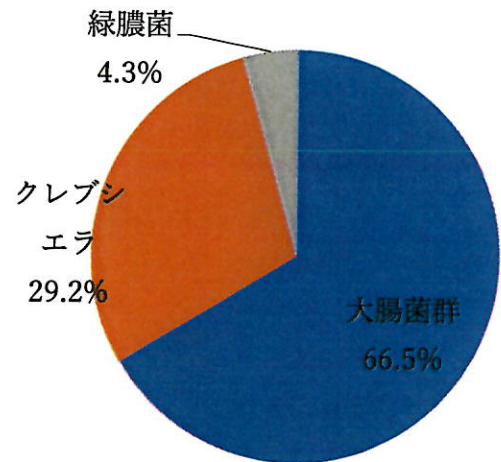
菌が検出された検体の中での雑菌を除く原因菌種割合を以下に示します。最多はレンサ球菌（※1）で、2番目に多かったのはCNSでした。次いでSA、G(-)菌（※2）と続きます。レンサ球菌、CNS、SA、G(-)菌で全体の90%を占める結果となりました。



グラフ1 原因菌種割合

G(-)菌の割合は21.6%（2021年）から16.6%（2022年）と減少しています。レンサ球菌の割合は32.1%（2021年）から35.8%（2022年）と増加しています。SA、CNSの発生割合は同程度です。

- ※1 レンサ球菌にはOS、ウベリス、エンテロコッカスを含む
- ※2 G(-)菌には大腸菌、その他の大腸菌群、クレブシエラ、緑膿菌を含む
- ※ アルカノバクテリウムをアクチ、コリネバクテリウムをコリネ、酵母様真菌をカビと表記



グラフ2 G(-)菌割合

※大腸菌群は大腸菌、その他の大腸菌群を含む

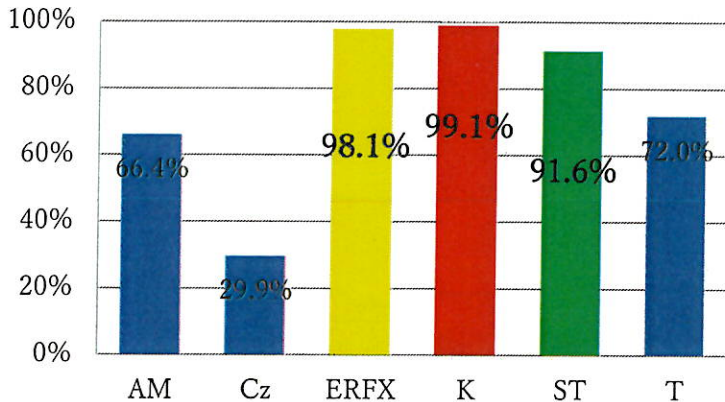
グラフ1にてG(-)菌としたものの内訳です。G(-)菌の発生分房数は161でした。大腸菌群が107分房で、割合は66.5%となり最多でした。クレブシエラは47分房で、割合は29.2%でした。緑膿菌は7分房で、割合は4.3%でした。



Total Herd Management Service

G(-)菌感受性割合

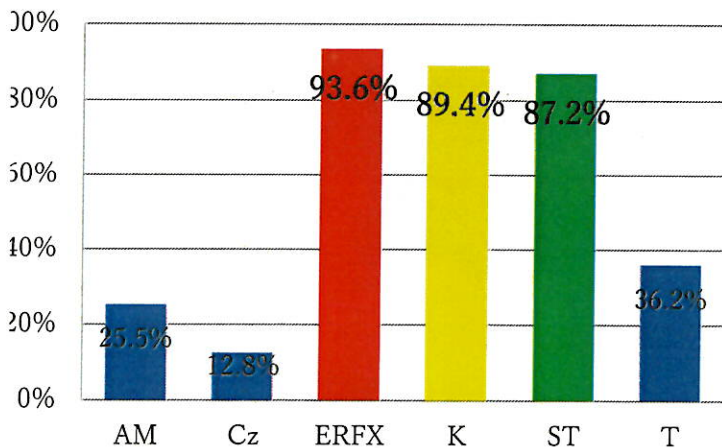
大腸菌群 (107)



グラフ 3 大腸菌群感受性割合

感受性割合の上位3つの薬品はK(カナマイシン・タイニーPK)、ERFX(バイトリル10%)、ST(トリオプリン)でどれも感受性割合は90%を超えています。これは昨年までの結果と変わりませんが、K(カナマイシン・タイニーPK)が昨年同様に僅かにERFX(バイトリル10%)の感受性よりも高い結果となりました。

クレブシエラ (47)



グラフ 3 クレブシエラ感受性割合

感受性割合の上位3つの薬品は大腸菌群と同じERFX(バイトリル10%)、K(カナマイシン・タイニーPK)、ST(トリオプリン)でどれも感受性割合は85%を超えています。大腸菌群と比較するとどれも少しずつ感受性割合は低いものの、ERFX(バイトリル10%)については90%を超える結果となりました。

緑膿菌については、7分房中3分房で感受性なしという結果になりました。残りの3分房はERFX(バイトリル10%)のみ感受性あり、残りの1分房はERFX(バイトリル10%)の他にT(OTC注・軟膏)、ST(トリオプリン)も感受性ありという結果になりました。

最後に

大腸菌群、クレブシエラどちらもERFX(バイトリル10%)、K(カナマイシン・タイニーPK)、ST(トリオプリン)の3薬品が高い感受性割合を示しました。大腸菌群に対して、T(OTC注・軟膏)の感受性は上昇傾向にあると感じます。しかしクレブシエラに対しては36.2%と依然低い感受性割合を示しました。

K(カナマイシン・タイニーPK)はERFX(バイトリル10%)と同じく殺菌的な抗生剤であり、軟膏(タイニーPK)もあります。抗生剤の慎重使用の観点からも大腸菌群、クレブシエラを疑う乳房炎に対してK(カナマイシン・タイニーPK)の使用を検討してみてはいかがでしょうか？

来月はSAやOS等のG(+)菌の感受性割合を紹介いたします。

富田大祐



Total Herd Management Service